

# アート'96の景色

美術

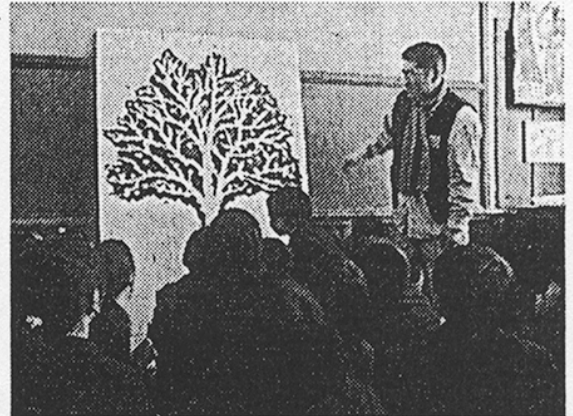
「学校と美術」と聞くと、図画工作の時間を思い出す人も多いだろう。だが最近、両者の関係は美術の授業だけでなく、学校全体にまで拡大してきている。いや、校内だけでなく町まわらず、その地域の人たちをも巻き込んだアート・イベントに発展しているのだ。

東京・杉並区立和泉中学校の美術教師でアーティストの村上タカシ氏は、ある日、家にあった一枚の抽象的な版画を美術室に掛けてみた。それを見た生徒たちは予想以上の反応を示した。ならば、学校全体を使って美術展を開いてみよう、杉並区には美術館がないが、わざわざ巨費を投じて美術館を建てるより、学校そのものを美術館にしたらどうだろう。こうして考え出されたのが、「IZUMIWA KUプロジェクト(学校美術館構想)」である。

一昨年の夏休み、村上氏が声をかけたアーティスト22人が同校を舞台に現代美術展を開催。生徒たちの父母もボランティアとして参加し、地域に根ざしたアート・イベントとしてマスコミでも取り上げられた。このプ

## 《学校》が《美術館》になる

### 住民巻き込み多彩なイベント



「柿の木プロジェクト」を生徒たちに説明する宮島達男氏(柳北小学校で)

う長期的な計画だ。以上は現役の小中学校の例だが、すでに廃校となった空間を使うアート・イベントはさらに多い。特に盛んなのが、ドーナツ化現象で子供が減り、市内に17もの廃校を抱える京都市。

加。昨年、パリ展に出品した同じメンバーが、今年は京都に場所を移して同校で公開制作を行い、19日まで作品を展示した。昨

おきたいのが、茨城県守谷町にある旧大井沢小学校を舞台にした茨城県主催のアート・イベント・イン・レジデンスの試みだ。昨年秋から冬にかけて、北米とアジアから招いた5人のアーティストが滞在し、同校の教室や講堂で作品を制作した。その間、アーティストたちは同校や近隣の学校でレクチャーやワークショップを行い、地域の人たちとの交流も活発だった。



村田 真

さて、様々な例を見てきたが、これらには共通する点が少なくない。まず、展覧会であれワークショップであれ、結果として作品を残すことよりプロセスを重視していること。また、地域の人たちと積極的な交流を図っていること。そのために、多くの住民が記憶を共有する公共空間として学校が選ばれていること、などだ。

トを建てて終わらせるのではなく、できるだけ多くの人が関われるものになりたい、つまりハードよりもソフトを重視しようと考えていたところだった。そんな時、「IZUMIWA KU」のことを知った小石原氏は勇気づけられ、95年度の1年間を通して20人のアーティストが参加する現代美術展やワークショップ、コンサートなどによる「アートワークのみ」を実現させた。この地区の住民のほとんどは同校の卒業生なので、全員が何らかのかたちで関わってもらうことを心がけたという。

もうひとつ、美術展ではないが、台東区立柳北小学校で進行中の「一時の蘇生」柿の木プロジェクトにも触れておきたい。これは、アーティストの宮島達男氏が長崎から持ち帰った被爆二世の柿の苗木を同校に移植し、みんなで育てていこうというもの。去る3月5日に植樹式が行われ、2005年には成長したこの柿の木に、宮島氏がデジタル作品を取り付けて、成人した卒業生とともに祝おうとい

まず、市主導のものでは総合的なアート・フェスティバル「芸術祭典・京」が昨年からこれらの廃校を会場にしており、今年も5月31日から3日間、ワークショップやシンポジウムを四条烏丸の旧明倫小学校で開く。

一方、東京でも廃校を利用して現代美術の交流展が企画されている。港区の旧赤坂小学校で、5月26日から現地制作に入り、6月23日まで作品展示やパフォーマンスが行われる「根の回復」として用意された12の環境がそれぞれ、テクノロジー・メディアを用いる日本とオランダから計12人が参加する展覧会で、こちらも同じメンバーで昨年オランダ展が開催されている。

最後にもうひとつだけ挙げておきたいのが、茨城県守谷町にある旧大井沢小学校を舞台にした茨城県主催のアート・イベント・イン・レジデンスの試みだ。昨年秋から冬にかけて、北米とアジアから招いた5人のアーティストが滞在し、同校の教室や講堂で作品を制作した。その間、アーティストたちは同校や近隣の学校でレクチャーやワークショップを行い、地域の人たちとの交流も活発だった。

最後に、この地区の住民のほとんどは同校の卒業生なので、全員が何らかのかたちで関わってもらうことを心がけたという。

最後に、この地区の住民のほとんどは同校の卒業生なので、全員が何らかのかたちで関わってもらうことを心がけたという。

最後に、この地区の住民のほとんどは同校の卒業生なので、全員が何らかのかたちで関わってもらうことを心がけたという。

最後に、この地区の住民のほとんどは同校の卒業生なので、全員が何らかのかたちで関わってもらうことを心がけたという。